

鹿嶋市郷土かるた 読札解説書

1. 音「い」 読札「いと荘厳なる 鹿島神宮」

鹿島神宮は武甕槌神たけみかづちのかみを祀る由緒ある神社です。奈良時代（718年頃）に編さんされた『常陸国風土記』には「天の大神の社」と記載されています。この武甕槌神は、武の神様としてあがめられ、皇族や武士から崇拝され、現在も多くの人達が参拝しています。

鹿島神宮の本殿は、江戸時代の1619年に二代将軍徳川秀忠によって建てられました。初代将軍徳川家康によって1605年に建てられた本殿は、この時、奥宮として引き移されました。

平安時代に作られた『延喜式神名帳』えんぎしきしんめいちょうでは、「伊勢・鹿島・香取」の三社だけが“神宮”と呼ばれ、とても格式の高い神社でした。

今も境内に入ると、厳かな雰囲気を感じられ、鹿嶋の悠久の歴史を伝えるところです。

2. 音「ろ」 読札「鹿行を結ぶ 神宮橋」

国道51号線上で鹿嶋市大船津と潮来市延方を結ぶ橋が神宮橋です。水郷と呼ばれるように鹿嶋市周辺は水運が中心でした。大船津の“津”も船着き場を意味し、かつては鹿島神宮を訪れる人たちも船を利用して、大船津から参拝に向かいました。

しかし交通手段の主流が車になると、鹿島神宮への参詣、通学、農・水産物の輸送、軍事上の重要性から昭和4年（1929年）に最初の神宮橋が開通しました。その後、昭和36年（1961年）に現在の神宮橋が、平成14年（2002年）FIFAワールドカップの開催に合わせ、新神宮橋が開通しました。現在は神宮橋と新神宮橋の二本の橋が、交通の要として重要な役割を果たしています。

3. 音「は」 読札「ハマナス咲く 自生地南限 大小志崎」

ハマナスは、バラ科の落葉小低木で、5月から7月ごろに紅紫色の美しい花を咲かせ、鹿嶋市の「市の花」でもあります。鹿嶋市の北側、銚田市との境に位置する大小志崎には、このハマナスが自生する場所があります。ハマナスは北海道の知床半島などの海岸砂地に数多く自生する北方系の植物で、本州では、茨城県（鹿嶋市）と鳥取県（鳥取市）がそれぞれ南限の地として大正11年（1922年）3月8日に「ハマナス自生南限地帯」として国の天然記念物に指定されています。その後、鳥取県大山町の自生地も昭和58年（1983年）7月2日に指定され、現在三か所の自生南限地があります。

4. 音「に」 読札「日本を守る 防人赴く 鹿島立ち」

天智天皇2年（663年）に白村江の戦いで唐（現在の中国）・新羅（現在の韓国の東側にあった国）の連合軍に大敗した倭軍（古代の日本）は、連合軍が攻めてくる危機を感じ、天智天皇3年（664年）、対馬、壱岐、筑紫国（現在の長崎県と福岡県の北側沿岸部）に

防人を配置して守りを固めました。はじめのころ防人は、遠江（現在の静岡県）以東の東国からおもに集められ、九州に赴きました。防人に選ばれた人たちは鹿島神宮で旅の安全と無事に故郷へ帰れることを祈って出発しました。これが“鹿島立ち”の起源です。

現在も旅の安全を祈って良い旅であるよう願いをこめて旅に出発することを“鹿島立ち”と言われています。

5. 音「ほ」 読札「豊作を 祈る乙女のお田植祭」

田植は、苗代で育てた稲を田んぼに移し植えることで、お米を作るうえでとても大切な作業です。そして豊作を祈り田植えの時期に行われるのが御田植祭おたうえさいです。鹿島神宮では、明治時代から始まり、現在では毎年5月1日に赤い襷たすきをかけた童女が集まり、笛や太鼓に合わせて田植歌を歌いながら御田植舞いを行い、豊作や健康に育つことを祈ります。

田の神を祀って、豊穰を願う農耕儀礼と結びついて祭礼になったとされ、全国各地で行われています。

6. 音「へ」 読札「平和にあそぶ 神鹿の群れ」

鹿島神宮の本殿でお参りをして、奥参道を進むと左手に鹿園ろくえんがあります。ここは江戸時代中頃まで神宮寺じんぐうじがあったところです。

鹿島神宮と鹿は深いつながりがあります。武甕槌神たけみかづちのかみの元へ使いとしてきたのが“天の迦久神かぐのかみ”で、鹿の神でした。鹿といえば奈良の鹿を思い出す人も多いと思いますが、この鹿たちの祖先は、鹿嶋から行った鹿と伝えられています。奈良時代、大いに栄えた藤原一族は、藤原家の祖先を祀る神社として、神護景雲元年（767年）6月に奈良に春日大社を建て、関係の深い鹿島神宮の神様 武甕槌神を祭神いちかみの一神として、分霊として祀りました。その時、武甕槌神は鹿の背中に乗り一年をかけて鹿島から奈良まで来たと言われ、各地に伝承が残っています。神様の使いとされる鹿は、非常に大切にされ、今も私たちを見守ってくれています。

7. 音「と」 読札「渡御の先陣 務めていくは 新田かぐら」

新田かぐらは、大船津の新田地区に伝わる神楽かぐらです。元々鹿島神宮境内御手洗にあった涼泉寺に獅子が保存されていました。このお寺が火災にあい、獅子だけが難を逃れ、その獅子と鹿島神宮に伝わる巫女舞を新田地区に移したものが新田かぐらの始まりと伝えられています。四種類の獅子舞（乱獅子、下りは、昇殿、幣へいの舞）と笛と太鼓、そして神楽歌から成り立っています。

新田かぐらは、1月下旬の村祈祷きとうの際に、地区の各戸を回って家内安全・五穀豊穰を祈願してまわるほか、12年に一度行われる鹿島神宮の大祭「御船祭みふねさい」では、笛や太鼓の音によって神様のお出ましが遠くから分かるよう、一番先頭に立ち、悪魔祓いござせんをして御座船を守り導く役割を担っています。

8. 音「ち」 読札「提灯あげて 神幸祭」

“神幸じんこう”とは、「神の御幸ぎょこう」を意味し、ご神体しんたいを神輿みこしに移して出かけることをいいます。鹿島神宮の神幸祭じんこうさいは毎年9月1日の夜に神輿が出発し本宮から二の大鳥居内の行宮あんぐうまで行き、翌9月2日に本宮に戻る還幸祭かんこうさいが行われます。夜お出かけになる神様が真っ暗では危ないと提灯を持って神様を迎えるようになり、江戸時代にはたくさんの提灯を竹につけ、銚場という広場で燃やすようになり、神輿をお出迎えする奉迎ほうげいの灯あかりであり、たくさんの提灯はたわわに実った稲穂を表し、秋の豊作を祈る祭りです。

9. 音「り」 読札「竜会城 悲しき姫の 物語」

竜会城りゅうかいじょうは中世に築かれたお城で、現在の山之上にありました。土を積み上げた土塁どるいが今も残っています。北側は田谷沼に面し、自然地形を最大限に活用したお城です。しかし、強大な勢力をもった佐竹氏によって天正19年(1591年)鹿島氏が滅ぼされると同じく築城途中の竜会城も落城してしまいました。

その時の悲しい伝承が今でも残っています。竜会城のお姫様と鹿島城の若君が相思の仲であったが、佐竹氏によって滅ぼされるとお姫様は悲しさのあまり田谷沼に身を投げてしまいました。時がながれ、明治時代に入り田谷沼が開拓されたときに鏡が出てきました。開拓者は「この鏡はお姫様が愛用していた鏡に間違いない」とお姫様を哀れんで弁天様を祀りました。

10. 音「ぬ」 読札「沼尾の池 風土記に残る 不老不死の蓮」

沼尾の池は、現在の田谷沼と呼ばれるところで、昔は豊郷小学校から北東に広がる沼でした。奈良時代(718年頃)に編さんされた『常陸国風土記ひたちのくにふどき』には、「社やしろの南に郡家ぐうけ(古代の役所)があり、社の北側には沼尾の池があった。翁かみよのいうには、神代に天より流れ来た水がたまって沼となった。この沼で採れる蓮根は他では味わえない良い味である。病気の者も、この蓮を食べると、たちどころに癒えるという。鮎や鯉も多い。」と書かれています。今は水田として開拓されましたが、台地に残る沼尾神社、そして坂戸神社は風土記の世界観を残す貴重な史跡として残っています。

1 1. 音「る」 読札「るりのつぼ 水晶の玉に 祈る後の安産」

“るりのつぼ”とはガラスのつぼのことで、この瑠璃の壺に納められていたのが水晶の玉です。鹿島神宮の宝物の一つに大小24個の水晶の玉があります。これは平安時代に藤原道長の娘で、後一条天皇の中宮（后）である藤原威子ちようげんが長元7年（1034年）8月に奉納したものとされています。源経頼の日記『左経記』さけいきには、瑠璃の壺に納めて皇子生誕祈願に奉納したと書かれており、常陸帯信仰ひたちおびとあわせて、鹿島神宮は安産の守り神としても信仰されるようになりました。

1 2. 音「を」 読札「名をあげた 藤原の祖 中臣鎌足」

中臣鎌足は、のちの藤原鎌足のことで、皇極天皇4年（645年）に当時権勢を誇っていた蘇我氏を中大兄皇子とともに倒し（乙巳の変）いっし、様々な改革を進めた人です。中臣鎌足の出生地は、大和藤原説と鹿嶋市下生説の二つがあります。下生説は、平安時代後期に藤原家がまとめた『大鏡』に、藤原鎌足は鹿島神宮のある常陸の鹿島で生まれたと記されています。鹿嶋市に残る言い伝えでは「神官の子として生まれ、名を鎌子といい、極めて利発な子でしたので、奈良の都へ行かせ、中臣本家に養子となった」と伝えられています。のちに、蘇我氏を倒し、天智天皇を支え、大織冠たいしよくかんという最高位の位を授かり、藤原の姓をたまわりました。その後の藤原家の繁栄を築いた偉大な人物です。下生地区にある鎌足神社（市指定史跡）の南に「藤原」の地名が残っています。

1 3. 音「わ」 読札「わすれるな 地震よけなら 要石」

鹿島神宮の奥宮から、南のほうに歩いていくと林の中に、柵に囲まれた場所に直径30センチメートルくらいで中心が少し窪んだ石があります。これが要石です。

古来より地震抑えの石として有名でしたが、特に注目されるようになったのは、江戸時代の安政の大地震（安政2年（1855年）10月2日）です。地震は地中おこなますにいる大鯰が暴れることにより引き起こされるものと考えられ、それを押さえつけているのが要石でした。安政の大地震は10月に神様が一堂に出雲大社に集まっているときに起きたため、武甕槌神たけみかづちのかみも留守にしていたため要石が外れて、地震が起きたと考えられ、地震直後に鯰絵が大流行します。鯰絵は願掛けや地震除けのお守りなどの役割のほか、当時の世相や庶民の感情を軽妙に伝えており、2ヵ月あまりで220種類以上の絵が作られました。

また、徳川光圀が石の底を探ろうと、領内の百姓数十人を集めて、要石の周囲を七日七夜掘らせたが、掘った穴は一夜にして毎回埋まってしまうため、遂に諦めたという伝承があります。

14. 音「か」 読札「かつての繁栄をしのぶ 林城」

鹿嶋市の史跡である林城は、鹿嶋政幹（鹿嶋城主）の弟の鹿嶋頼幹が、現在の鹿嶋市林の地に城を構えたことから始まります。頼幹は、林六郎左衛門と名乗り、その後頼幹の子孫は林氏を名乗りました。天正19年（1591年）城主林時国の代に、林氏や鹿嶋氏など鹿行の常陸平氏一族は佐竹氏に敗れ、城は落城しました。林城は、中城と外城からなり、堀や土塁・帯曲輪・腰曲輪など中世城郭の形状が山林の中に今も残されています。

15. 音「よ」 読札「頼朝が 平和を祈って 梅竹の鞍」

源頼朝は、後に鎌倉幕府と呼ばれる東国に独立した武家政権を築いた人で、当時権勢を誇っていた平氏一門を打倒するため、坂東武士と呼ばれる武士たちとともに関東で挙兵し、壇ノ浦の戦いで平氏を滅ぼします。

鹿嶋神宮は、武の神として崇敬されていましたので、源頼朝も挙兵の翌年（治承4年（1180年））、日立地方の三か所を社領として鹿嶋神宮に寄進しています。また建久2年（1191年）に、神宮の占いにより戦乱の予知を聞いたとき、平和を願って神馬を奉納したと伝えられ、この時に一緒に奉納された鞍（梅竹蒔絵鞍 附 四手蒔絵居木一双）が国の重要文化財として今も鹿嶋神宮に伝わっています。

16. 音「た」 読札「大師像立つ 護国院」

現在、新町区にある護摩堂と呼ばれているお寺は、降摩山護国院経音寺（真言宗智山派）といい、和銅2年（709年）に創建されたお寺で、もともと鹿嶋神宮境内にありましたが、江戸時代中頃に現在の地に移りました。本尊は不動明王です。

神宮神前不断の護摩所との勅号を受け、「国家安穩祈願」の護摩奉修することから別名「護摩堂」といわれます。足利尊氏御教書なども残り、崇敬を受けていたことがわかります。

また護国院には、「大師板東」という安政年間から続けられていた行事があり、明治5年（1872年）、明治天皇の認可により、「鹿嶋速證講」と改称されました。

17. 音「れ」 読札「歴史を伝える 鹿嶋城」

平安時代末頃の鹿嶋では、常陸平氏（大掾氏）の一族である吉田清幹の三男成幹が鹿嶋郡を支配し、鹿嶋三郎と名乗っていました。鹿嶋城は、その成幹の子・政幹が、宮中地区の吉岡と呼ばれる地に築城した城です。現在の城山公園に本丸（城の中核）があり、そこから南は鹿嶋高校の先の国道51号線のあたりまで、東は鹿嶋市商工会館がある辺りまで鹿嶋城の城内でした。その後、成幹・政幹の子孫は、代々鹿嶋氏を名乗り、領地を受け継ぎましたが、戦国時代・天正19年（1591年）二十代城主・鹿嶋清秀の代に佐竹氏に

敗れ鹿島城は落城しました。今は本丸跡地が城山公園として鹿嶋市の桜の名所になっています。

18. 音「そ」 読札「そびえ立つ 神宮見つめる ご神木」

鹿島神宮本殿のうしろに一際大きな杉の木が立っています。これが御神木です。高さ43メートル、根本の周りが12メートルあり、樹齢は1,300年以上とされています。

古来日本では自然にある岩や木など、様々なものに神霊が宿ると考え、その木などを御神木と崇め、その前で祭りなどを行っていました。やがて建物を造り、神様のいる場所を造りましたが、基本的には御神木などの前に建てられています。

鹿島神宮も御神木の前に本殿が作られ、古代より永らく崇敬されています。またこの御神木の後ろには、鏡石かがみいしと呼ばれる石があり、鹿嶋の大神おおかみの御坐座みましのざとされています。

19. 音「つ」 読札「塚原ト伝 鹿島新当流」

塚原ト伝えんとくは延徳元年（1489年）に鹿島神宮の神職ト部家しんしょくうらべけ、吉川左京覚賢よしかわさきょうあきかたの次男（幼名は朝孝）として誕生、幼少の頃に沼尾の塚原城主塚原土佐守安幹の養子となり、後に元服して塚原新右衛門高幹と名乗ります。

幼少の頃から実父に鹿島の太刀、養父の安幹に香取神道流えいしやうを学び、永正元年（1504年）、16歳ごろで廻国修行に旅立ち、その後、大永3年たいえい（1523年）、弘治3年こうじ（1557年）と全部で三回の廻国修行を行い、元龜2年げんき（1571年）83歳の生涯を閉じました。一回目の修行を終えて帰国すると、鹿島神宮に千日籠って精神修行に励み、やがて悟りを得たト伝は「一の太刀ひとつのたち」を完成させます。

親子が、兄弟が、血で血を争う戦国時代にあって「剣は人を殺める道具にあらず、人を活かす道なり」（活人剣かつじんけん）と平和思想をもって生きぬいたト伝を、いつしか人々は剣聖の名でたたえました。その流儀は後に鹿島新當流（茨城県指定無形文化財）として今も伝えられています。

20. 音「ね」 読札「寝ないで 身を慎む 庚申日 百体数えた 庚申塔」

庚申講こうしんこうとは、庚申の日に人の身体の中さんしにいる三戸さんしという虫が、寝ている間にその人の罪過を天帝へ報告すると信じられていたため（報告された人は命を奪われる）、身体から抜け出ないように、夜通し寝ずに善を行い、身を慎んで過ごす信仰のことです。この講の記念などに建立された石塔が庚申塔で、市内の多くの地区で江戸時代から大正時代にかけて建立された庚申塔が確認されています。

鹿嶋市の明石地区には、江戸時代後期（1846～1855年）の十年間しょうめんこんごうぞうに青面金剛像が掘られた石塔10基と「庚申」という文字が刻まれた石塔90基、合計100基が奉納

された百^{ひゃっこうしん}庚申があります。

百庚申と呼ばれる例は、利根川沿いに群馬・埼玉・千葉・茨城と並ぶように所在が確認されていますが、茨城県内ではほとんど例がなく、大変貴重なものであり、明石地区に所在する「明石の百庚申」を平成30年（2018年）4月に市の有形民俗文化財に指定しました。

21. 音「な」 読札「七つ井戸 大切に使う 清き水」

水道が整備されるまでは「娘は鹿島へ嫁に出すな。腰骨の折れるほど水を汲まされるからなあ」といわれるほど、鹿島町宮中の台地に住む人々にとって、朝晩の水汲みは大変なものでした。この宮中の周辺には貴重な水場として七つ井戸がありました。

- 一 染井^{そめい}……宮中・宮下の厨区集会所のうしろにあり、今も湧き出ています。古代には神宮の染織につかわれていたそうです。
- 二 成井^{なるい}……昔は葦井^{あしい}と言われるほど葦が繁り、厨台に通じる坂道（成井坂）にその名が残っています。今は雑木林のふもとに水がわき出ています。
- 三 華柄井^{かがらい}……宮中大町の西の谷にあり、戦前は多量の水が湧き、農業用水や種粃の浸水場として利用されていましたが、現在は埋没しています。
- 四 寸府井^{すんぷい}……宮中下生の与平次坂にその跡地が残り、水は出ていません。
- 五 保田井^{ほだい}……神野の猫がえり^{やづ}谷にあり、今は宅地造成により埋没しています。
- 六 清水井^{しみずい}……宮中栗林の東の谷にあり、今もわき出ていて、水田の用水として利用されています。
- 七 波佐間井^{はざまい}……宮下の個人宅地内にあり、今は埋没し、竹が繁っています。

22. 音「ら」 読札「ライバルに 負けじと応援 スタジアム」

茨城県立カシマサッカースタジアムは、平成5年（1993年）4月に日本で初めての本格的なサッカー専用スタジアムとして誕生しました。収容人数約1万5千人、全席背もたれ付きの個別席、スタンド全面が屋根付きなどの設備を有するスタジアムでした。

その後、平成14年（2002年）FIFAワールドカップ日韓大会の時に、大規模改修が行われ、現在は二層式スタンドを持ち、約4万人を収容できるスタジアムになりました。Jリーグや、ワールドカップなどの国際試合などが行われ、多くの名シーン・名勝負が繰り広げられました。

23. 音「む」 読札「昔から 鹿島に伝わる 七不思議」

昔から鹿島神宮には、鹿島の七不思議として以下のものが伝えられています。

- 一 要石^{かなめいし}…地震抑えの石として有名で、徳川光圀が石がどこまで埋まっているのかを探ろうと、周囲を七日七夜掘らせたが、掘った穴が一夜にして埋まるため、諦めたという伝承があります。
- 二 御手洗池^{みたらしいけ}…こんこんと流れ込む湧き水は、日照りの時期でも水量に変わりなく、澄み切って底の遠方が浅く見えます。池の周辺を巡っても、常に足元が一番深く見えるよう変化して見えるので、深さは大人でも子供でも胸の高さまでといわれます。
- 三 末無川^{すえなしがわ}…高天原の松林の中より湧き出る水が流れて小池となり、数十メートルほど流れて、地中に入って行末がわからないといわれています。現在、池の水は枯れてしまいました。
- 四 御藤の花^{みふじ はな}…藤原鎌足公のお手植えと言われ、この花が多く咲いた時は豊作、少ない時は凶作であると伝えられています。現在この藤の木は枯れてありません。鹿島神宮拝殿の東側にあったとされています。
- 五 海の音…宮中地内で、波の響きが北の方に聞こえる時は快晴、南の方に聞こえる時は雨になるといわれています。
- 六 根上りの松…鹿島山および高天原に生える松は、すべて伐り株より芽が出てくることから、幾度伐っても枯れないといわれています。
- 七 松の箸…鹿島山に生える松で箸をつくるとヤニが出ないといわれ、昔は正月の七日間は太箸と言って松の箸を作って使っていたそうです。

24. 音「う」 読札「午年は 式年大祭 御船祭」

御船祭^{みふねさい}は、12年に一度、午年^{うま}に行われる鹿島神宮のお祭りです。9月2日の朝、鹿島神宮のご祭神のご分霊^{みこし}を乗せたお神輿が、行列と共に大船津まで下ります。俗に浜下りと呼ばれ、大船津の一の鳥居でお神輿^{おごせん}を御座船に寄せ、潮来市の対岸香取市の加藤洲の斎杭まで向かいます。御座舟が百余の舟を従えて鰐川・浪逆浦を渡る様子は、荘厳で見ごたえがあります。加藤洲に着くと香取神宮側^{おむかえさい}で御迎祭が行われます。御迎祭を終えると帰路につき、午後4時半頃にお神輿は鹿島神宮楼門前に到着します。

大祭を盛り上げるべく9月1日から3日まで様々な行事が行われ、祭り期間中町内では山車^{だし}が引き出され祭りをいそどります。

25. 音「の」 読札「後の世に発展みすえた 鹿島港」

鹿島港は、鹿嶋市と神栖市にまたがる鹿島灘と北浦に挟まれた砂丘地帯を掘り込んで建設された掘込式港湾です。Y字型に掘り込まれ、岸壁の総延長は1キロメートルにも達し日本国内最大規模を誇ります。昭和38年（1963年）から鹿島開発が進み、鹿島臨海工業地帯として、昭和44年（1969年）に世界有数の掘込式港湾として開港しました。港周辺には石油化学、鉄鋼、飼料、木材など約160の企業が立地する日本最大級のコンビナートとして発展しました。平成23年（2011年）5月に大型船に対応した港湾機能の整備等を実施する港湾として、国際バルク戦略港湾（穀物）に選定されています。

26. 音「お」 読札「鬼塚の 赤土踏み入る 高天原」

下津の海へ行く途中、鹿島灘を望む南側一帯を高天原と呼んでいます。この高天原にある、東西長さ85メートル、高さ10メートルほどの小高い丘を鬼塚おにつかと呼んでいます。ここは昔、鹿島の大神が東征のとき、従わない鬼賊を退治して、その首を埋めたところであるといわれ、その時、たくさんの鬼の血で染まったので、今も土が赤いと伝えられています。

27. 音「く」 読札「国に尽くし 戦い終わって 忠魂碑」

日本は、明治・大正・昭和時代に外国と戦争をしました。明治27年（1894年）の日清戦争開戦から、昭和20年（1945年）の太平洋戦争終結まで、戦争で多くの人々が亡くなりました。戦後、国のために尽くして亡くなった人々の御霊を慰め弔い、平和が続くように願いを込めて、戦死者の氏名や階級などを刻んだ忠魂碑が、市内各地に建てられました。

28. 音「や」 読札「焼いておいしい 鹿島灘はまぐり」

鹿島灘の沿岸で獲れるはまぐりは、外洋性のはまぐりです。標準和名を「チョウセンハマグリ」と言い、汀線ハマグリまたは潮線ハマグリとも言われています。輸入はまぐりと混同されやすいことから、平成7年（1995年）1月から、鹿島灘漁業権共有組合連合会（大洗町・鹿島灘・はさきの3漁協）が中心となり「鹿島灘はまぐり」と命名しブランド化されています。また、茨城県の「春のさかな」として、県を代表する魚介類にも選定されています。

貝殻の大きさやちょうつがいの形は、それぞれ異なり、一度外してしまうと他の殻とは決して合わないことから、結婚式や正月、雛祭りなどのおめでたい席に欠かせない食材です。

代表的な料理は潮汁うしおじる、焼きはま、酒蒸しなどがあり、鹿島灘地区では、お肉の代わりにはまぐりを使った「はまぐりカレー」が古くから親しまれています。

29. 音「ま」 読札「豆力士 健康祈る 相撲祭」

相撲祭は、鹿島神宮のご祭神武甕槌神たけみかづちのかみが出雲国で大国主命おおくにぬしのみことと国譲りの交渉をされた際に、大国主の息子である建御名方命たけみなかたのみことと力比べを行ったことに由来して毎年11月3日に行われています。化粧まわしをつけた宮中地区の7歳までの男の子が神前で相撲をとります。勝敗はすべて引き分けとするのが定めです。相撲をとった豆力士には、お守りや町内からは果物やお菓子の賞品があります。

30. 音「け」 読札「県指定文化財の 慈眼寺 両界曼荼羅」

浜津賀には、慈眼寺じげんじというお寺があります。お寺の中には、「両界曼荼羅りょうかいまんだら」という室町時代の掛け軸があり、茨城県の指定文化財になっています。曼荼羅とは密教の教えである仏の世界観を絵に表したもので、仏の世界は「悟りの世界の胎蔵界たいざうかい」と「知恵の世界の金剛界こんごうかい」が二つ揃う事で完成されるといわれます。

両界曼荼羅は、胎蔵界と金剛界を表した二つの曼荼羅から成り、大日如来だいにおちによらいを中心に四方に諸尊が配置されたものが胎蔵界曼荼羅、九つに区分して諸尊が集合した図柄になっているのが金剛界曼荼羅になります。

31. 音「ふ」 読札「ふつのみたまの剣は 神刀」

鹿島神宮の宝物の1つに、「日本最大の直刀」である「ふつのみたまのつるぎ 劔 霊 劔」があります。長さが2.71メートルあり、日本一大きな直刀です。奈良時代から平安時代に作られたものと推定されており、国宝に指定されています。

『古事記』や『日本書紀』の日本神話の中では、「劔 霊 劔」は鹿島神宮のご祭神である「武甕槌神たけみかづちのかみ」の刀として登場します。

また、この国宝を参考にして、鹿嶋の歴史に関係深い古代の製鉄技術を再現することにより、21世紀の幕開けそして、鹿嶋での2002年ワールドカップ開催を記念するため、復元品が制作されました。

平成11年（1999年）夏から鹿嶋市内の小学生を中心に市民延べ約4,000人の協力を得て、鹿嶋市の海岸で砂鉄を集め、平成14年5月に「平成の大直刀」が完成しました。

32. 音「こ」 読札「古代の役所 郡家跡 発掘調査で 蘇る」

古代の郡役所ぐんやくしょは当時、「郡家ぐうけ」と呼ばれ、税の徴収や政務を行っていました。古代の鹿嶋郡は、十八の郷からなる神郡しんぐんでした。神郡とは、全国に8つしかない、大きな神社を支えるために設けられた神領しんりやうです。『常陸国風土記』には「その社やしろの南に郡家あり。」という

記述がありますが、昭和54年（1979年）、これを裏付けるように鹿島神宮の南に位置する宮中字神野向・荒原地区から、古代の郡役所に関連する大きな溝などが発掘調査で見られ、昭和61年（1986年）に国の史跡に指定されました。現在までの調査で、税を納めた倉庫群や政務を行った郡庁、厨家(台所)施設などの建物跡や文字が書かれた土器（墨書土器）などが見つかっており、古代の地方郡役所として全体像が明らかになっていること、全国で8つしかない神郡の役所であること、鹿島神宮との関わりが深いことなど古代史を解明するうえでも重要な遺跡です。

33. 音「え」 読札「えのきの下 静かに眠る 天狗党」

激動の幕末、「攘夷」（外国を追い払うこと）を掲げ、水戸浪士を中心として結成した「天狗党」と称する若者たちがいました。天狗党は、幕府が米国と結んだ日米修好通商条約に基づいて開港された横浜港での外交封鎖を目的に筑波山で挙兵しました。幕府は天狗党の取締りを諸藩に指示し、幕府軍・棚倉藩兵の攻撃を受け、元治元年（1864年）9月に天狗党の一派が鹿嶋に逃れてきました。天狗党は大船津から舟で行方へ向かおうとしますが、幕府軍の砲撃で転覆し、舟中の人々は、水中に飛び込んだり自害したりし、鹿嶋では23人が召し捕えられ、下生地区の石橋杭などで打ち首にされました。23名の遺体は、大掾辺田の馬捨場へ埋められました。今、大掾辺田には、明治時代になり、斉藤俊（鹿島郡初代郡長）より建立された「殉難諸士乃墓」が残っています。現在は鹿嶋市指定史跡となっています。

34. 音「て」 読札「鉄をきたえて 千三百年」

『常陸国風土記』の鹿島郡の条には、「慶雲元年（704年）に国司の采女朝臣が鍛冶師の佐備大磨らを率いて、若松の浜の砂鉄を採って剣を作った。」と記載されています。このように古代から鹿嶋は製鉄と深い縁があります。市指定史跡である比屋久内遺跡は木滝地区にあります。鉄くず(鉄滓)や炉の跡が発見され、砂鉄を用いて鉄を作る“大鍛冶”の場所であったと考えられています。

35. 音「あ」 読札「安産祈って 常陸帯」

常陸帯は鹿島神宮の特別な宝物の一つです。昔から本殿奥深くの箱の中に納められていて開かれることはありません。この帯は、十四代仲哀天皇のお妃である神功皇后の腹帯と伝えられています。神功皇后が戦に出る時に鹿島神宮の神様のご加護を願ってこの帯を身に着け、応神天皇を無事にご出産したことにちなんで現在、鹿島神宮の安産のお守りにも用いられています。

36. 音「さ」 読札「祭頭祭 イエートーホー 鳴り響く」

これまで3月9日に行われていた祭頭祭は、「鹿島の豊竹トホヨトヤ（豊穂良豊穂弥）～」

というその囃言葉からも分かるように五穀豊穰や天下泰平を願うお祭りです。毎年、鹿島神宮を中心に南北合わせて50余りの地区から、卜定（占い）によって二地区が選ばれ、祭頭囃を奉納しています。

その起源は、奈良時代とも平安時代とも言われています。祭頭祭の記録として現存する最古の文書「吉川家文書」は、建仁4年（1204年）、この時は片野（宮中字厨台）・長保寺と平井・宝持院が祭りの頭人を務めた記録が残っています。

元々は男性のお祭りで、昭和40年代頃までは男性しか参加していませんでしたが、時代の移り変わりと共に、今では女性や小さな子どもたちも囃子人として参加しています。昭和51年（1976年）12月25日に文化庁から記録保存の措置を必要とする文化財として「国選択無形民俗文化財」の指定を受けています。

37. 音「き」 読札「宮中野 豪族眠る 古墳群」

宮中野古墳群は、鹿島神宮の北、北浦に面した宮中野の台地上にあります。古墳とは豪族のお墓です。宮中野古墳群には前方後円墳や円墳、帆立貝式古墳、長方墳などさまざまな形の古墳が128基確認されており、県内でも有数の古墳群として知られています。被葬者は、当時権力を掌握していた豪族クラスの墓です。その中でも、茨城県下五番目の規模をもつ墳丘全長107.5メートル、前方部高さ5.7メートル（前方部）、後方部高さ約7.5メートルの「夫婦塚古墳」と呼ばれている前方後円墳は、市の指定史跡になっており、古墳の墳丘を近くで見ることが出来ます。

38. 音「ゆ」 読札「夕日で 真赤に染まる 北浦湖畔」

北浦が夕陽で染まる景色は、今もむかしも変わりません。北浦の台地の縁辺部には、多くの古墳があります。これらの古墳群は、当時北浦を帆走する船上から臨まれ、その威容を誇ることを目的につくられたのではないかとされています。北浦の対岸（潮来市、行方市側）にも、古墳群があり、古代経済の基盤であった北浦文化圏の水田地帯をめぐって豪族たちが争っていたことを彷彿とさせます。

北浦は夕陽の名所で、晴れた日には筑波山の姿も見れます。

39. 音「め」 読札「名月の 句を残す 芭蕉ゆかりの 根本寺」

宮中下生に所在する瑞鷹山根本寺は、推古天皇20年（612年）に聖徳太子が創建し

た寺と伝えられています。建久^{けんきゅう} 2年（1191年）に源頼朝により再興され、弘安^{こうあん} 4年（1281年）の蒙古襲来の時には勅印を与えられた古いお寺です。江戸時代の俳人・松尾芭蕉も、貞享^{じょうきょう} 4年（1687年）8月、44歳の時にこの寺を訪れています。根本寺の仏頂和尚^{ぶつちようおしょう}は芭蕉の禅の師でした。芭蕉はその夜、雨後の月見をしました。このとき体験した内容を記した文が『鹿島詣^{かしまもうで}』（鹿島紀行^{かしまきこう}）です。そして、「月早し 梢は雨を持ちながら」、「寺に寝て まこと顔なる月見かな」と詠んだ俳句の石碑が境内本堂前に建てられています。そして、翌年、芭蕉は「奥の細道」として旅をしています。

40. 音「み」 読札「みろくおどりで 元氣百倍」

「鹿島みろく」は、鹿嶋市や神栖市などで近年まで盛んに行われていた鹿島地方に伝わる民俗芸能です。その歌と踊りは、主に地域のおばあさん達によって行われ、伝えられてきました。昭和の終わり頃までは多くの地区で行われていましたが、ほとんどが廃れ、現在市内では2から3地区が継承しているのみになっています。

地区によって少しずつ歌詞が違っていたようですが、「彌勒様^{みろく}が海の向こうから船に乗って幸福を運んでくる」という信仰と、地元の鹿島の神様を讃える内容が混ざり合った歌詞になっています。平成21年、鹿島みろくは、文化庁から記録保存の措置を必要とする文化財として「国選択無形民俗文化財」の指定を受けています。

41. 音「し」 読札「十一面観世音菩薩は 大福寺」

棚木の^{とむら}大福寺の本尊であるこの像は、源平合戦の死者の霊を弔うために平景清の娘である人丸が安置したと伝えられています。正式名称は「十一面観世音菩薩坐像^{じゅういちめんかんぜおんぼさつざう}」といい、頭部には慈悲面^{じひ}・忿怒面^{ふんぬ}・狗牙面^{くげ}・仏首の十一面を持っていて、あわれみの表情が示されています。

観世音菩薩は仏教の信仰対象である菩薩^{いちぞん}の一尊です。観音菩薩が変化した神の一つで、六観音の一つでもあります。病気治癒などの現世利益を祈願して十一面観音像は多く祀られました。

42. 音「ひ」 読札「ひろった土器 一つ一つに 鹿嶋の歴史」

鹿嶋市は原始古代から残された遺跡の宝庫です。教科書で見る縄文土器や弥生土器もたくさん市内から発見されています。奈良・平安時代頃の土器で、墨で文字が書かれた墨書^{ぼくしょ}土器という土器も発見されています。墨書土器には、「神宮^{かみのみや}」や「鹿嶋郡厨^{かしまぐんくりや}」などの文字が書かれたものがほとんどですが、中には記号や顔が描かれたものなどもあります。土器の破片一つ一つに鹿嶋の歴史が詰まっており、とても貴重な歴史資料です。

43. 音「も」 読札「物忌さまは 神様のお妃」

鹿島神宮には古くから明治4年（1871年）まで、物忌ものいみという位くらいの高い女性神官がいました。

物忌さまは、お正月に本殿に入り御幣を取り出して新しい御幣にと取り換えるなどの重要な神事を行っていました。昔、本殿へはこの物忌様しか入る事ができませんでした。「物忌」という言葉は、慎んで心身を清めてこもる事を意味します。物忌になった女性は、その後結婚せずに宮中神野地区に建てられた物忌の館やかたで一生を過ごし、両親や家族にも会わず、神様に奉仕したことから神様のお妃のように見る人もいました。

44. 音「せ」 読札「世界から 情報受け取る パラボラアンテナ」

鹿嶋には最大34メートルの非常に大きな研究用パラボラアンテナがありました。これは鹿島宇宙技術センターと呼ばれ、衛星通信や宇宙電波応用などの研究開発を行っている研究施設です。最初は、平井丘の松林と芋畑の中に直径30メートルのアンテナが昭和38年（1963年）に建てられました。翌、昭和39年（1964年）10月の東京オリンピックで、世界初の国際衛星テレビ中継に成功し、世界から注目されました。

また平成14年（2002年）4月に国土地理院より日本の緯度・経度の基準を世界測地系の国際基準に合わせたとき、日本の基準点を鹿嶋のパラボラアンテナ（26メートル※現在は無い）の位置としました。さらに研究においても電波を利用した時間・空間に関する分野で多くの成果があげられています。

45. 音「す」 読札「砂浜で 塩炊き出世 文太長者」

室町時代に成立した御伽草子の二巻に「文正草子ぶんしょうそうし」という物語があります。物語の主人公は、鹿島神宮の大宮司だいぐうじに仕えた文太という人物です。かつて大宮司に仕えた文太は、角折の浜で一生懸命うまい塩をつくるために努力し、近隣諸国まで文太の塩は有名になり、塩炊きで成功し、大金持ちになって出世します。更に文太の二人の娘たちが都の中将や帝に召されるというおめでたい事づくしのお話です。このため貴族の娘たちがこぞって読んだそうです。角折の霜水寺そうすいじというお寺は文太の屋敷跡と言われている、はまなす公園の敷地内に霜水寺西堂跡が市指定史跡として残っています。